

## 連載 プロマネの現場から

### 第 145 回 中国における新型コロナウイルスの状況

蒼海憲治 (大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

新型コロナウイルスの4月12日時点の状況は、全世界で、感染者は150万人、死者9万人を超えましたが、まだまだ終息の見通しがわからない状況です。

日本では、4月8日午前0時より、緊急事態宣言が7都府県に対して出されました。新型コロナウイルスとの戦いは、長期戦のため、この数か月間が、感染拡大を抑え込めるか否かによって、非常に重要な局面だと思います。

一方 中国では、昨年12月に、最初の感染者が発見され、1月22日には、武漢市を含む湖北省の全面封鎖を行いました。封鎖後、2か月余を経た3月末には、湖北省を除くと、一か月以上、新規の感染者が発生していない都市が大半となっています。

中国政府からは、3月中旬には、感染撲滅に対する勝利宣言が出されました。完全終息までは、まだまだ時間がかかるものの、上海や大連などでは、生活実感として感染の封じ込めができているようにみえます。

ただし、米国などから中国の発表される感染者には無症状の感染者が含まれていないとの批判を受け、4月1日からは、それまで公開対象外としていた無症状の感染者を公表し始めました。そのため、公開当初は、感染者の報告数は一時的に増えましたが、それも終息傾向にあり、上海など主要都市では、新型コロナウイルス以前の日常に戻りつつあります。

ただし、現在は欧米からの帰国者から感染者が散発しているため、感染爆発の第二波への警戒感は持ち続けています。

このメルマガが届く時点で、日本の感染者が、東京の置かれている「感染爆発の重大局面」のままなのか、欧米の諸国のように急増しているかはわかりません。

しかし、8万人以上の大量の感染者を出した中国での対策の中には、今後の日本に参考にして、活かせるものもあると思います。

中国の新型コロナウイルスの感染者は、1月22日の湖北省を封鎖以降に急速に拡大し、封鎖して13日後にピークになり、一日当たり4000名余に達しました。また中国全土で、1月30日までの予定だった春節の休暇を2月2日まで3日間延長しました。大連など感染者の少なかった地域は、2月3日から業務を再開しましたが、上海市と浙江省等では、2月9日まで(食料品など生活必需品を扱う商店以外の)一般企業の業務が禁止となりました。

しかし、翌2月10日以降は、多くの企業は、在宅勤務を中心に業務を再開しています。ただし、2月中旬の時点の地下鉄では、1車両あたり2~3名しか乗っていない状況でし

た。つまり、1か月間余は、通勤・通学を含め、移動が大幅に抑制されました。この人の移動を極端に抑制したことにより、その後の終息につながったと思います。

3月に入ると、新規の感染者が数週間発生しなかったため、地下鉄などの通勤も通常に近く戻っています。

そして、中国の中でもとりわけ深刻な状況にあった武漢市ですが、4月1日から外出許可が認められるようになり、消毒が終わったオフィスは順次業務を再開しました。

3月中旬以降は、欧米各国から中国に戻る人々による感染者が急増したため、入国者全員に対するPCR検査がなされました。外国からの入国者からの感染拡大と無症状の感染者の存在のため、まだまだ予断を許しませんが、中国ではこの3か月の対応により、感染検知と対応のシステムができています。

### (1) 入国時のPCR検査

最初に、中国の入国時の検査の状況を紹介します。

2月中旬に、一時的に東京に戻っていたのですが、3月中旬に再度、上海に戻りました。

上海浦東空港に到着後、乗り継ぎのある人、中国の方から順次降機し、日本人などの外国人は、1時間半後に降機できました。検疫で、健康チェックとして、事前のアンケートに基づき、5分ほどの質疑を受けます。

入国審査の前に、健康チェックの結果、パスポートに仕分けがされます。中国政府から新型コロナウイルスの非重点国家の扱いがされている場合、「問題なし」の緑のシールを貼られます。一方、重点国家の扱いがされている場合、本人の健康状態を踏まえて、「隔離の必要性あり」の黄または赤のシールを貼られます。

荷物受取後、居住地区別に分かれます。長寧区行きの検査施設行き送迎バス待合場所で待機します。

1時間程待った後、20人ほどでグループとなり、送迎バスに移動します。

私の場合、欧米人一人以外は、中国人と日本人が半々でした。

検査施設は、虹橋空港の北にある臨空一号公園でした。周囲に住宅など何もない公園の一角に、ビニールテントが2つありました。1つは、PCR検査の受付を行う場所であり、もう1つは、PCR検査の検体採取を受ける場所でした。

PCR検査は、綿棒のようなもので、喉の奥と鼻の奥それぞれから検体採取するもので、検査そのものは一人あたり1分ほどで終わりました。しかし、PCR検査終了まで、待機場所で待つ必要がありました。その時間、8時間。午前中に到着した便であれば、当日中に自宅に戻れますが、午後到着便であれば、翌朝まで待機場所で宿泊することとなります。同僚や駐在員から聞いたところでは、実際には平均12時間前後かかり、MAX30時間かかっていました。

ただし、PCRの検査結果で、自分自身や家族が陽性になった場合だけでなく、飛行機内の前後3列に感染者が発生したり、また、検査施設行き送迎バスの20名の中に陽性だった場合、連絡が来て隔離施設に隔離されることになります。

また、そうでない場合でも、自宅で2週間の強制隔離が求められます。自宅での強制隔離は、マンションのある小区の管理者の監視下におかれます。

PCR検査を受診した感覚では、検体採取の体制そのものは、とてもシンプルです。中国では、感染拡大から1か月後には、武漢市内のみで一日当たり2万件の検査体制を構築したといわれています。2か月経った3月半ばには、政府関係者から中国全土で「1日170万人分の検査資材を生産できる」との発言がされるように、対象者全数検査ができる資材と環境が構築されています。

次に、4月12日現在の上海市の新型コロナウイルスに対する対策の様子です。

## (2) 住宅・マンションの状況

まず、上海市以外からの入居者に対しては、2週間の隔離が求められます。

マンションによっては、部屋のドアのところに、センサーをつけられ出入りすると検知されるケースや、シールを貼ってドアを開けたことがわかるしくみにするケースがありました。その代わりに、一日に、2度、体温測定と外卖(ワイマイ)と呼ばれる出前の配達やゴミ捨てをしてくれました。隔離期間中は、この外卖や、アリババ系のスーパーである「フーマーフレッシュ」が、スマホで注文すると30分ほどで配達してくれるので、とても助かりました。

ところで、小区への出入りですが、3か所あった入り口は1つだけに制限されました。

小区に入る際には体温検査が必要とされ、37.5度以上の場合、入場を拒否されます。小区には、住居者以外は入場できません。そのため、出前も、小区の入り口に設置された棚に置かれており、そこまで取りに行く必要がありました。

しかし、3月27日以降は、住居者以外でも小区内、マンション内に入れるようになりました。そのため、出前が部屋まで届くように戻りました。

## (3) オフィスの状況

- ・ オフィスビルの入出管理

会社の入っているオフィスビルは、上海市外から戻ってきた場合、2週間の自宅隔離終了後、出勤することができます。2週間経過以降は、ビルの入り口で、毎回、体温測定と、携帯電話に入れた健康状況管理のアプリ「随申码」(スイシェンマー)の確認がされます。

「随申码」のQRコードが緑色の表示であれば、入館することができます。

この「随申码」は、他のオフィスビルへの入館だけでなく、飲食店への入場時も同様に求められます。現在、スマホのキャッシュレス機能と同様に、「随申码」がなければ、中国の生活はできなくなっています。

#### ・オフィス内

座席は、極力飛沫感染を防ぐため、左右両隣りや向かい側の座席に人が座らないよう座席配置を見直しています。この前提は、オフィスに出勤する社員を、半分から3分の1以下にすることでした。そのため、全社員の出勤予定を管理し、座席配置と連動させる運用をしています。

4月になった現在も、オフィス勤務と在宅勤務を併用しています。個人的には、オフィス勤務及び客先・パートナー訪問は週3日、残りは、在宅勤務としています。

オフィス内は、会議中はもちろんのこと業務中も、常にマスク着用が義務づけられています。

空調は、全館が一体となっている場合、空調を通してウイルス感染の恐れがあるため、1月末の真冬の時期から使用が禁止されていました。そのため、4月初旬においても、コートや羽織って業務する必要がありました。夏場であれば、クーラーが使えないため、非常に厳しいことが想定されます。

在宅勤務は、従来からの Skype、Zoom、Yealink などのクラウド会議システムの活用に加え、テンセントの企業版ウィチャット(微信)、アリババのディンディン(阿里釘釘)、バイトダンス(字節跳動)のフェイスチャー(飛書)などが、会議ツール、コミュニケーションツールとして活用されています。特に、後者は、300名ほどの同時会議が可能な機能を含め、無料で提供されているため、1800万社超の企業が活用し、3億人以上の人が在宅勤務しているといわれています。

#### (4) 地下鉄やバスの状況

上海の地下鉄は、駅の入場時に、体温検査がされています。2月28日から、地下鉄車両の乗車時にQRコード「上海地下鉄安全防疫乗客登記」のスキヤンによる、任意の乗車

登録が始まりました。乗客は、各車両のガラス窓などに貼られたQRコードを読み込み、携帯番号を入力します。

この登録によって、万が一同じ車両で新型コロナウイルスの感染者が発生した場合、経路の特定や濃厚接触者の追跡を行ない、携帯電話宛てに注意喚起の連絡が届くようになりました。市内の公共バスでも3月2日から同様な対策が実施されています。

このような対策の実施と、症状のある感染者そのものが発生しなくなったことで、地下鉄やバスの混雑もほぼ以前と同じに戻っています。

#### (5) デパートや公園の状況

デパートやショッピングモールは、オフィスビルと同様に、体温検査が実施されていましたが、3月中旬以降は、体温検査を実施しない建物も増えてきています。家の近くの高島屋も、現在は実施していません。

一方、中山公園など大きな公園の入り口では、体温検査が実施されています。

付近を散歩すると、ほぼ全員がマスクを着用しています。マスクはスーパーでもコンビニでも普通に売っていて購入できる状況になっています。3月中頃の日本では、マスク不足のせいもあったと思いますが、通勤車両でもマスクをしていない人がいたり、また、週末の公園では多くの若者や家族がマスクをしていなかったりしていたことと対照的です。

ただし、デパートやショッピングモールは営業しているものの、映画館やカラオケなど、密室空間となる場所は、まだ営業は再開していません。

#### (6) 学校の状況

春節休み明け以降のオフィスでの業務の順次再開と異なり、依然として再開しておらず、上海日本人学校は、日本のゴールデンウィークの5月4日に授業再開予定になっています。

中国の学校も、学校への通学は再開されていなかったのですが、2月中旬には、いち早く、オンライン授業が開始されています。

ところで、上海市は、中学3年生と高校3年生のみ4月27日から再開との発表がありました。その他の学年は、3年生の状況を踏まえて、早ければ5月7日に再開予定になっています。

大学については、外国からの留学生を多数受け入れる必要があるため、まだ再開時期が決まっていません。

#### (7) 武漢市の状況

なんとといっても、一番大変だったのが、武漢市を含む湖北省の状況だったと思います。

1月22日から、市全体が封鎖となった武漢市ですが、封鎖してから2月後半までは、1世帯から1名、許可証を持った人が、週に2回ほど買い出しが可能でした。

移動できない不便さはあるものの、中国全国から武漢を助けようという号令のもと、生鮮食料品を含め、スーパーには豊富に食材や商品が揃っていたといえます。

しかし、2月後半から3月末までの1か月間、市民全員が強制隔離となります。必要な食料などは、各マンションの管理組合の人が購入し各家庭に届ける代わりに、部屋から出てはいけなくなりました。一番、厳しかった時期だと思えます。

武漢市内は、地区毎に、感染者の有無、発生状況により、リスクの「高」・「中」・「低」の区分けがなされています。症状のある感染者が発生すると「高」、無症状の感染者が発生すると「中」、そして、感染者が10日以上発生していないと「低」になります。現時点、「高」の地区はゼロとなっており、「中」が3%、残りの「低」は97%になっています。

そのため、3月最終週から、市政府に移動申請を提出し、許可された人から順次、外出できるようになりました。オフィスを、移動許可が下りた社員と阿姨（アイ）というお手伝いさんらで消毒後、政府の許可を得ることで、4月1日以降、業務を再開することができました。

4月8日には、封鎖が解かれ、中国全土への移動が再開されました。中国全土から武漢に応援に来ていた医療関係者などを含む10万人余が全国に移動しました。その中には、無症状の感染者がいる疑いもあり、まだまだ予断を許しません。

また、仕事に従事する人には、外出許可証が発行されますが、子供や老人などには、まだ外出許可証は発行されておらず、自宅での隔離が続いています。

中国の他の地域においても、リスクの「高」・「中」・「低」の区分けはされていきます。

今後、症状のある感染者及び、無症状の感染者が発生すると、その地域は封鎖され、また一定期間、新規の感染者が発生しなければ、封鎖が解かれる、という運用が継続すると思われれます。

#### (8) 新型コロナウイルスに対する経済対策

今回の新型コロナウイルスに対する中国の経済対策です。米国がいち早く最大2兆ドル（220兆円）規模の経済対策を打ち出したように、各国で大規模な景気対策や経済支援策が検討されていますが、中国でも大型景気対策が検討されています。

4月1日の21世紀経済報道によると、今後の重大項目投資として、13の省と都市のインフラに関して総額34兆人民元（530兆円）を投じることが公表されています。そして、2020年として、3兆元（47兆円）の投資が行われるといわれています。

その他、企業及び個人の負担を軽減するため、各種の減税や補助金などの施策も続々と発表されています。

ところで、中国社会全体が、従来のキャッシュレス社会から、さらなる進化・クラウド社会が出現するような現象がみられます。

中国のネットやSNSでは、クラウドを意味する「雲」を接頭語につけた、様々な「雲〇〇」というキーワードが流行っています。

たとえば・・・

- ・クラウド勤務、クラウド会議 : テレワークによる在宅勤務
- ・クラウド授業 : 小学校、中学校、高等学校までがオンラインでの授業を実施。
- ・クラウド診察 : オンラインによる診療。感染症の場合、病院で感染するリスクが高いため、症状などを聞くことで一次切り分けができます。
- ・クラウド・ランチやクラウド・カフェ : 女性の方が中心になりますが、みんなで動画と音声を共有しながら、昼食を同時に食べたり、コーヒーやお茶を飲みながら会話したりします。SNS上にはその様子が多数アップされています。

最後に、今回の新型コロナウイルスは、ワクチンが開発されるか、それとも全世界の7割が感染し、人類としての集団免疫を獲得するまで続く可能性がある、といわれています。各国の感染がピークを迎えていない現時点、まだいつ終息になるかわかりません。

しかし、長期戦になるのであれば、いまからでも様々な打ち手はあり、できることは何でもやる姿勢を持ち続ける必要があります。諸外国に比べれば、幸いにも1か月以上遅れているように見える日本ですが、この時間差を利用して、いまからでも新型コロナウイルスに対する様々な準備を進めていただきたいと思います。

中国の大半の都市が1か月強、武漢でさえ2か月強封鎖することで新型コロナウイルスが抑え込めたことをみると、日本でも緊急事態宣言下で、移動の抑制と適切な隔離ができれば、新型コロナウイルスが抑え込めるのではないかと、思います。

以前、今年の目標は、年初にたてた事業や個人の様々な目標はいったん保留にして、いま時点は、まず、「生きる」を意味する「活着(ホアジャ)」の精神が大切だといいました。いろいろやりたいことはたくさんありますが、新型コロナウイルスが終息するまでは、なにわともあれ、まず「活着」、生き抜くことが最優先だと思います。